

中学生・高校生におけるゆるし傾向性と 外在化問題・内在化問題との関連の検討

石川 満佐育* 濱口 佳和**

本研究では、近年諸外国で研究が盛んに行われている forgiveness の概念に注目し、ゆるし傾向性として実証的に取り上げ、わが国の中学生・高校生を対象に、ゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連を検討することを目的とした。研究1では、中高生 574 名を対象に、ゆるし傾向性尺度の作成を行った。因子分析を行った結果、「他者へのゆるし傾向」、「自己への消極的ゆるし傾向」、「自己への積極的ゆるし傾向」の3因子からなるゆるし傾向性尺度が作成された。研究2では、中高生 553 名を対象に、ゆるし傾向性尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、十分な値の信頼性、妥当性が確認された。研究3では、中高生 556 名を対象に、ゆるし傾向性と外在化問題(身体的攻撃・関係性攻撃)、内在化問題(抑うつ・不安)との関連を検討した。相関、重回帰分析により検討を行った結果、ゆるし傾向性と外在化問題、内在化問題との間には、負の関連が示された。従って、中高生にとって、ゆるし傾向性は、外在化問題、内在化問題の軽減に有効である可能性が示された。

キーワード：ゆるし傾向性、外在化問題、内在化問題、中学生、高校生

問題と目的

人々が、自らが受けた侵害や被害に対応する際の方略の代表的なものには回避と報復がある。これらの対応は正常で、一般的ではあるが、過度に用いられ続けると、本人にとっても、その対人関係にとっても、ひいては、社会に対しても否定的な結果をもたらすことがある (McCullough, 2001)。

現在わが国の児童生徒をめぐる様々な問題も、侵害・被害体験の反応によってもたらされた否定的な結果と考えられるものが多い。こうした侵害体験は、一方では不登校や引きこもりなどの問題になり得る。また、青少年の凶悪犯罪の中には、他生徒からのいじめ被害や、親からの被虐待といったことが背景要因にある場合が存在する (藤岡, 2001)。

本研究では、侵害経験から生じるネガティブな結果の拡大を防止するために重要とされる forgiveness¹ の概念に注目する。

心理学者が、forgiveness の概念について関心を示し

たのは 1980 年代初期であった。それは、宗教の枠を超えて心理学者の関心を引き、実証的研究の対象となった (McCullough, 2001)。その間、多くの研究者により定義が与えられているが、一致した定義はなく、まさに多様であるといえる。

近年の海外の研究では、forgiveness と心身の健康との関連を検討するうえで、傾向性 (dispositional) レベルで forgiveness を捉えようとするアプローチが有効であると考えられている (Thompson, Snyder, Hoffman, Michael, Rasmussen, Billings, Heinze, Neufeld, Shorey, Roberts, & Roberts, 2005)。そこで、本研究では forgiveness を「ゆるし傾向性」²として捉え、「知覚された被害・侵害によって生じた反応を、ネガティブなものからポジティブ、ニュートラルなものに意識的に変化させようとする認知的傾向」³と定義する。

海外の成人を対象とした実証的な研究からは、forgiveness は精神的健康のポジティブな側面と関連があることが見出されており (Toussaint & Webb, 2005)、forgiveness が高いほど心理的に適応していることが実証されている。また、対人関係の回復に焦点をあて

* 筑波大学人間総合科学研究科
ishikawa@human.tsukuba.ac.jp

** 筑波大学心理学系
yhama@human.tsukuba.ac.jp

¹ 海外における forgiveness について述べる際、各研究者によって捉え方が異なるため、一義的に訳語を当てることが不適切な場合がある。そこで、本研究では、海外の所見を引用する場合には、そのまま forgiveness と表記していくこととする。

² 英和大辞典によると、forgiveness は、日本語で「許すこと」、「容赦」、「寛大さ」、「寛容さ」と訳される (小西・南出, 2001)。しかし、既存の訳語では、被検査者、研究者の捉え方によって広範囲な解釈がなされる可能性がある。従って、本研究の定義との整合性を考慮し、forgiveness を「ゆるし傾向性」と捉えることとした。

た介入において, forgiveness の有効性は支持されている (Enright & Fitzgibbons, 2000)。さらに, forgiveness への介入は心理療法のみならず, いじめ, 暴力の問題に対する有益な教育方法としても有効活用できる可能性が示唆されている (Pargament, McCullough & Thoresen, 2000)。

以上のように, 海外において, forgiveness は精神的健康, 関係性の修復を考慮する上で重要な概念として, 実証的研究が既に行われてきている。ところが, 国内では forgiveness に関する研究はまだ少なく, 中心的な主題として取り扱われた研究は極僅かしかないのが現状である。Denham, Neal, Wilson, Pickering, & Boyatzis (2005) は, ゆるすという能力は, 対人関係の適応, 個人の健康の両方にとって重要な指標となり得ると指摘している。その上で, 青年期の社会的認知の発達, 仲間関係の重要性, 問題解決能力の育成という発達の観点から, 従来の成人を対象とした研究だけでなく, 児童, 青年を対象にした研究を積極的に行うべきであると主張している。従って, わが国の中学生・高校生の諸問題をゆるし傾向性の観点から検討することは可能であり, 必要であると考えられる。

ところで, 海外では, 傾向性レベルでの forgiveness を測定する尺度がいくつか開発されている (Thompson et al., 2005)。しかし, わが国では傾向性レベルの個人差を測定するという観点からの尺度はみあたらない。また, 国内の研究では, 対象のほとんどが大学生であるため, 適応との関連という観点から, 中高生を対象にした研究は行われていない。これまで, 国内の中高生を対象に, ネガティブな結果をもたらす側面, 例えば, 怒り, 攻撃行動などについては, 多くの研究が行われてきた。しかし, 侵害場面に対して, 「ゆるそうとする」といったポジティブな側面については, これまであまり議論されてこなかった。ネガティブな結果にならないように, 適切な調整の仕方を獲得することを求められる現代において, ゆるし傾向性というポジティブな側面から, 中高生の適応を検討する必要があると考えられる。そこで, 国内でのゆるし傾向性の研究を今後進めていく際, 中高生を対象としてその個人差を測定

する尺度の開発が必要とされる。

尺度作成で考慮すべき点として, ゆるしを与える対象の問題が挙げられる。Forgiveness の対象(何をゆるすのか)によって精神的健康への影響は異なることが見出されており, forgiveness の対象を包括的に捉えていく必要があると指摘されている (Thompson et al., 2005)。これまでの海外の先行研究から, forgiveness の対象には, 従来主に研究がなされてきた他者 (forgiveness of others ; FO) の他に, 自己 (forgiveness of self ; FSe), 状況 (forgiveness of situation ; FSi) がある (Thompson et al., 2005)。青年期の心理社会的適応の側面を検討する上で, ゆるしの対象によって影響が異なることが予想されるため, 本研究においても対象を包括的に捉えていくことにする⁴。

本研究では, ゆるし傾向性を実証的に取り上げ, 中学生・高校生の外在化問題, 内在化問題との関連を検討することを目的とする。児童生徒が示す諸々の問題は, 外在化問題と内在化問題に大別される (Achenbach, 1991)。海外の成人を対象とした研究において, forgiveness は心身の適応の促進に役立つことが示されているため, 本研究では, 心身の適応の指標として, 外在化問題, 内在化問題を取り上げることとした。本研究は以下の3つの研究から構成される。研究1では, ゆるし傾向性尺度を作成し尺度構成を行う。研究2では, ゆるし傾向性尺度の信頼性, 妥当性を検討する。さらに, 研究3では, ゆるし傾向性と外在化問題, 内在化問題の両指標との関連を検討する。

研究 1

目的

中高生を対象にしたゆるし傾向性尺度の作成を行い, 因子構造を検討する。さらに, 内的一貫性の観点からの信頼性の検討, および, 性差, 学校段階差の検討を行うことを目的とした。

方法

(1)調査対象者 茨城県内の公立中学校3校の1～3年生9学級313名(男子154名,女子159名), 並びに公立高校2校の1～3年生8学級309名(男子149名,女子160名)が対象となった。これらの内, 欠損値のない574名(中学男子;139名,同女子;141名,高校男子;142名,同女子

³ Forgiveness を行動面から捉えようとする, 外的動機(反撃への恐怖, 社会的圧力)に基づくゆるし行動でもポジティブなものとして捉えてしまう恐れがあり, 本来ポジティブなものと考えられている forgiveness の概念と反するという問題が生じる。従って, 本質的には, ゆるし傾向性を一貫性のある, 安定的な認知的傾向として捉え, 行動をもって指標とは考えないこととする。

⁴ ゆるし傾向性の定義に加えて, 本研究では, 被害・侵害を「自分, 他者, 状況はどうあるはず, どうあるべきかという期待や想定に反している」とみなす出来事」と定義することとする。知覚された被害・侵害を別に定義することにより, 他者以外の対象についても網羅し得る定義になると考えられる。

; 152名, 有効回答率92.3%) のデータが分析対象となった。高校のサンプリングについては, 高校入試に高校間において学力差が存在することを踏まえ, できるだけ偏りをなくするために進学校, 進路多様校の2校を選択した。

(2)調査内容

①ゆるし傾向性尺度

尺度作成にあたり, 諸外国の forgiveness を測定する尺度のうち, Thompson et al., (2005) が開発した Heartland Forgiveness Scale (以下; HFS) を参考にした。HFS は, 成人用ではあるが, ゆるす対象を包括的に捉えた上で精神的健康との関連を検討するために開発されているので, 本研究の目的とも合致すると考えられる。まず, HFS を邦訳した項目が中高生に適しているかを, 中学教員と協議した。その結果, それらの項目は, 難解であり, 実情にそぐわないものが少なからずみうけられた⁵。従って, HFS を邦訳し中高生用に用いることを目的とした尺度作成は断念し, ゆるし傾向性尺度の項目は著者自ら作成した。予備項目作成の際には, ①本研究の定義を踏まえた上で, 被害, 侵害経験後, ネガティブな反応を持続させてしまうか, ポジティブ, ニュートラルにしようとするかといった表現にすること, ②被調査者個人のゆるしの捉え方を反映させないように, 項目文に「ゆるす」という表現は使用しないこと, ③中学教員の指摘を受け, 出来る限り具体的な表現, わかりやすい表現にすること, ④先行研究を基に, ゆるしの対象には自己, 他者, 状況を採用すること, を考慮して作成した。

自己, 他者, 状況へのゆるし傾向について, それぞれ20項目前後(ネガティブな表現, ポジティブな表現を半数ずつ)を作成した。これらの項目に対し, 心理学を専門とする大学教員, 心理学を専攻する大学院生5名, 中学教員3名によって項目の表現が適切かどうか, ゆるし傾向性の定義に即した項目であるかを検討してもらい, 内容的妥当性を確認した。最終的に, 56項目の4件法「はい(4点)」、「どちらかといえばはい(3点)」、「どちらかといえばいいえ(2点)」、「いいえ(1点)」の自己報告式尺度を作成した。

⁵ 中学教員から, HFS の項目では, see them as good people, think badly といった表現が使われており, 具体性が欠けるために, 悪く考えるとはどんな考えか, よい人とはどんな人かというところで考えてしまうのではないかと指摘を受けた。協議の結果, 難しい語句の使用は避け, 具体的な表現になる項目を作成したほうが良いのではないかと示唆を受けた。

②ゆるせなかった出来事に関する自由記述

本研究の分析には使用されなかった。

(3)調査実施手続き 調査協力の得られた学級において, 学級担任により集団一斉方式で実施された。質問紙調査実施の際には, 調査実施前に対象生徒に対して, 本調査が学校の成績に一切関係がないこと, 調査用紙を学校の教員が見ることはないこと, どうしてもやりたくない場合には, 回答しなくてもよいことを質問紙の表紙に記載した上で, さらに担任教師にその旨を説明するように依頼した。回答は無記名で行われた。

(4)調査実施時期 2005年7月中旬

結果と考察

(1)ゆるし傾向性尺度の因子構造の検討 56項目のうち(逆転項目は得点を逆にして分析), 得点分布に偏りのみられた8項目を除く(全て天井効果; $M+1SD > 4$ 点), 48項目に対して, 主因子法, プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果, スクリー基準, 解釈のしやすさを総合的に考慮したところ, 4因子解が最適と判断した。第1因子は他者へのゆるし傾向に関する項目が大きな因子負荷量を示し, 第2因子には, 自己へのゆるし傾向のうちの逆転項目が大きな因子負荷量を示し, 第3因子には, 自己へのゆるし傾向に関する残りの項目が大きな因子負荷量を示し, 第4因子には, 状況へのゆるし傾向に関する項目が大きな因子負荷量を示した。因子負荷量の絶対値が, .40以下の計13項目を除外したところ, そのうちの9項目は, 状況へのゆるし傾向の項目であった。状況へのゆるし傾向の項目は4項目のみとなり, α 係数を算出したところ, 高い値は得られなかった($\alpha = .57$)。学校段階, 性別ごとに分析を行ったところほぼ同様の結果となった。

これらの結果から, 本研究で作成された状況へのゆるし傾向の項目では, まとまりのある大きな因子として抽出されにくいと判断したため, 無理に尺度化することは見合わせることにした。本研究では, 状況を表す単語を生活環境とした(例: No3 自分の思うようにいかな生活環境にいるとしたら, イライラすると思う。; No5 うんざりする生活環境にいるとしても, なんとかやっていこうと考える。)。普通の境遇で育った中高生にとって, 不遇な生活環境を思い浮かべることは一般的に困難であり, 状況に関する項目の文を, 比較的思い浮かべやすい, 自己の失敗, 対人関係などに結びつけて多義的に解釈してしまったと考えられる。また, Thompson et al.(2005)は, 状況の例として, 病気, 災害, 運命などを挙げている⁶。本研究で作成された項目では, Thompson et al.(2005)が考える状況の概念とは, 若干異なる解釈が

なされた可能性がある。さらに、状況へのゆるしの概念に関して、Worthington (2006) は、多くの研究者が、状況 (situation) が適切な侵害、被害の源であるということに賛同してはいないと述べている。従って、本研究の定義のうえでは、状況へのゆるし傾向の概念は適用可能ではあるが、概念の検討、並びに項目の表現については今後の課題とし、本研究では対象を自己と他者に限って進めることとした。

状況へのゆるし傾向の項目を全て削除した後、改めて因子分析を行い、尺度構成を行った。

48項目のうち、状況の項目(13項目)を削除し、計35項目について主因子法、プロマックス回転により因子分析を行った。その結果、スクリー基準、解釈のしやすさを総合的に考慮したところ、3因子解が最適と判断した。因子負荷量の絶対値が.40以下の12項目を削除した後、再度因子分析を行った因子パターン行列をTABLE 1に示す。第1因子は、他者へのゆるし傾向を想定した項目が高い負荷量を示していたため、「他者へのゆるし傾向」因子と命名した⁷。第2因子に高い負荷量を示したものは、自己へのゆるしを想定した項目のうち、ネガティブな反応をニュートラルに変化させようとすることを表す項目であった。従って、第2因子は「自己への消極的ゆるし傾向」因子と命名した⁸。第

3因子には、自己へのゆるしを想定した項目のうち、第2因子に含まれない項目が比較的高い負荷量を示した。これらの項目は、ネガティブな反応をポジティブに変化させようとすることを表した項目が占めている。従って、第3因子は「自己への積極的ゆるし傾向」因子と命名した。なお、学校段階、性別ごとに因子分析を行ったが、同様の3因子解が得られた。

自己へのゆるしの項目が2つの因子に分割された理由として、日本人の自己の認識の特徴が挙げられる。アメリカ文化では、自己を肯定的に捉えようとする動機が顕著であるが、日本人は自己批判傾向が顕著で、自分の欠陥や至らぬ点に注意が向けられがちであることがいわれている(高田, 2004)。そのため、自分をゆるそうとする傾向においても、ネガティブな反応を維持しないようにすることと、ポジティブに変容させようとすることは質的に異なる可能性がある。一方、他者へのゆるし傾向が1因子となった点であるが、日本人は、相互協調性が優勢であるといわれ、他者との関係性が重視される(高田, 2004)。他者への反応がネガティブであるか、そうでないかは、その後の関係性に大きな影響をもたらす。そのため、他者に対する反応の変化の内容というよりは、ネガティブな反応が維持されないことに焦点が当てられるため、同次元で認識されたと考えられる。

以上から、日本人の特徴も踏まえたゆるし傾向性尺度が作成されたと判断し、各因子に.40以上の負荷を示した項目の得点を合計し、それぞれ他者へのゆるし傾向得点(10項目)、自己への消極的ゆるし傾向得点(8項目)、自己への積極的ゆるし傾向得点(5項目)とした。ゆるし傾向性尺度の記述統計並びに、各下位尺度の相関をTABLE 2に示す。各下位尺度の記述統計、度数分布から、他者へのゆるし傾向尺度は、やや高得点側への偏りがみられるが、各下位尺度とも正規分布が仮定できると判断した。

(2)内的整合性の確認 各下位尺度について、Cronbachの α 係数を求めたところ、他者へのゆるし傾向尺度では.87、自己への消極的ゆるし傾向尺度では.85、自己への積極的ゆるし傾向尺度では.78であった。従って、いずれも、高い内的一貫性が確認された。

(3)性差と学校段階差の検討 各下位尺度について、性別(2)×学校段階(2)の2要因分散分析を行い、性差と学校段階差が検討された(TABLE 3)。その結果、他者へのゆるし傾向得点では、性別($F(1,570)=12.05$)の主効果は1%水準で有意であり、女子のほうが男子よりも高かった。自己への消極的ゆるし傾向得点では、性別

⁶ Thompson et al. (2005) のHFSの項目中では、例に挙げたような単語は使用されておらず、「uncontrollable circumstances」, 「bad situations」といった表現が用いられていた。本研究においても、病氣、災害という言葉は使用せず、「状況」という単語を用いて項目を作成した。しかし、内容的妥当性を確認した際、中学教員から状況という言葉はわかりづらいのではないかと指摘され、協議した結果、生活環境という言葉に置き換えることとした。

⁷ 他者へのゆるし傾向と類似する概念として寛容性が挙げられる。渡辺(2006)は、寛容の定義を考察し、寛容の対象となる他者に非があるとは考えないと述べている。このことから、他者へのゆるし傾向と寛容性の概念との違いは、被害、侵害の経験の有無という観点から述べることができ、他者へのゆるし傾向は、被害・侵害を経験した場合のみ成立する概念であると考えられるが、寛容性は被害・侵害を経験しているかは問われない概念であると考えられる。従って、侵害・被害経験の有無という点から、他者へのゆるし傾向と、寛容性は異なると考えられる。

⁸ 第2因子の項目をみると、自分を責め続けないようにする傾向を表す項目が多かった。Hall & Fincham (2005) は、自己へのforgivenessを定義し、その中で「自己への報復(自責、自傷行動)をしないようにすること」と述べている。概念的に、自己へのゆるしには、自責をしないことが含まれていることがわかる。因子の命名については、他の因子名との兼ね合い、さらに、第3因子との対比を考慮し、自己への消極的ゆるし傾向と命名した。

TABLE 1 ゆるし傾向性尺度の因子パターン行列 (プロマックス回転後; N=574)

№	Item	I	II	III	M	SD
I 他者へのゆるし傾向 ($\alpha=.87$)						
27	以前, 自分に嫌な事をした相手にも, 親切にしようと思う。	.80	-.14	.06	2.64	0.92
20	以前, 自分に嫌な事をした相手と仲良くする気にならない。R	.76	.03	-.10	2.55	0.99
28	以前, 自分に嫌な事をした人にも, 今はやさしくしようと思っている。	.73	-.16	.06	2.62	0.92
33	自分を傷つけた相手には, 何か嫌な事が起きればよいと思う。R	.69	-.12	.04	2.64	1.00
15	以前, 自分に嫌な事をした相手でも, 困っていれば助けようと思う。	.62	.26	-.21	2.73	0.98
39	以前, 自分に嫌な事をした相手は, 今もひどい人だと思ってしまう。R	.60	.21	-.10	2.63	0.99
2	以前, 自分を傷つけた相手でも, その人との関係がよくなる方法を考える。	.58	-.15	.12	2.52	0.99
35	自分に嫌な事をした相手の批判を, いつまでもしないようにしている。	.55	.06	.07	2.75	0.86
45	自分に嫌な事をした人を恨み続けないようにしている。	.52	.01	.16	2.96	0.92
6	他の人から嫌な事をされたら, やり返す方法を考えてしまう。R	.50	.13	-.03	2.63	1.06
II 自己への消極的ゆるし傾向 ($\alpha=.85$)						
4	思うように上達しないことがあると, 自分を責め続けてしまう。R	.05	.74	-.06	2.47	1.01
17	うまくいかないことについて, 自分を責め続けてしまう。R	.01	.74	.05	2.41	0.95
11	以前の自分の失敗の事を考えると, 今でも落ち込んでしまう。R	-.02	.68	-.02	2.45	1.13
29	何か出来ないことがあると, いつまでも自分に腹を立ててしまう。R	.00	.65	.03	2.39	1.02
34	自分の失敗のことで, いつまでも悩むことはない。	.01	.65	.06	2.46	1.07
42	何か失敗すると, 自分はダメな人間だと思ってしまう。R	.01	.63	.08	2.43	1.02
40	自分の努力が無駄になってしまったら, 悔しくて仕方がないと思う。R	-.01	.57	.15	2.07	0.99
56	何か失敗したとしても, いつまでもくよくよすることはない。	-.05	.43	-.10	2.52	1.00
III 自己への積極的ゆるし傾向 ($\alpha=.78$)						
7	失敗しても一生懸命頑張った結果なら, 自分をほめるようにしている。	.00	.00	.69	2.64	0.91
19	何か失敗したとしても, 自分は頑張ったと考えるようにしている。	-.05	.02	.69	2.56	0.89
25	努力が無駄になっても, その努力は自分のためになると考えられる。	-.08	.13	.58	2.61	0.95
1	何か失敗したとしても, それは自分のためになると考えるようにしている。	.06	-.03	.58	2.63	0.95
46	何か失敗したとしても, 自分には他にいいところがあると考える。	.13	.03	.57	2.75	0.97
負荷量平方和		5.43	3.17	1.35		

注) Rは逆転項目を示す。

TABLE 2 ゆるし傾向性尺度の記述統計, および各尺度間の相関係数

	M	SD	歪度	尖度	②	③
①他者へのゆるし傾向(10項目)	26.60	6.60	-0.31	-0.21	.14**	.30***
②自己への消極的ゆるし傾向(8項目)	19.18	5.80	0.16	-0.68		.31***
③自己への積極的ゆるし傾向(5項目)	13.19	3.23	-0.17	-0.31		

*** $p < .001$, ** $p < .01$

TABLE 3 性別×学校段階ごとのゆるし傾向性尺度の平均値

	中学生		高校生	
	男子 (N=139)	女子 (N=141)	男子 (N=142)	女子 (N=152)
他者へのゆるし傾向	25.93 (7.10)	26.96 (7.27)	25.37 (6.25)	27.94 (5.46)
自己への消極的ゆるし傾向	21.56 (5.71)	19.47 (5.65)	17.86 (5.84)	17.82 (5.26)
自己への積極的ゆるし傾向	13.16 (3.46)	13.19 (3.07)	12.84 (3.54)	13.49 (2.85)

()内は標準偏差

($F(1,570)=6.37$)の主効果が1%水準で有意であり, 男子のほうが女子よりも高かった。また, 学校段階 ($F(1,549)=31.35$)の主効果が1%水準で有意で, 中学生の

得点のほうが, 高校生の得点よりも高かった。自己への積極的ゆるし傾向得点においては, 主効果, 交互作用は認められなかった。

2 要因分散分析を行った結果、他者へのゆるし傾向得点では、性差が認められ(男子<女子)、自己への消極的ゆるし傾向得点では、性差、学校段階差が認められた(男子>女子, 中学>高校)。海外の先行研究では、FO と共感性は正の関連が指摘されている (Denham et al., 2005)。日本における共感性の研究では、女子が男子よりも高くなることが報告されており (登張, 2003)、共感性が反映した結果、女子のほうが男子よりも他者へのゆるし傾向の得点が高くなったと考えられる。また、自己への消極的ゆるし傾向において、海外の FSe に関する先行研究 (Tangney, Boone, & Dearing, 2005) と一致した有意な性差(男子>女子)が認められたが、自己への積極的ゆるし傾向については、有意な性差は認められなかった。本研究で作成されたゆるし傾向性尺度の性差、学校段階差に関しては、今後さらに研究を進めたいうで議論する必要がある。

研究 2

目的

研究 1 で作成されたゆるし傾向性尺度の再検査信頼性、併存的妥当性を検討することを目的とした。妥当性の検討のために、攻撃性、自尊感情の尺度とゆるせなかった出来事の頻度を用いる。

海外の forgiveness の尺度を用いた研究では、FO と怒り、報復との間に負の関連が示されている (Thompson et al., 2005)。そのため、反応的攻撃性尺度 (濱口, 2004) の下位尺度である怒り、報復意図と他者へのゆるし傾向との間には負の関連があることが予測される。また、FSe と怒りとの間でも負の関連が示されているため (Thompson et al., 2005)、自己へのゆるし傾向性の両尺度は「怒り」と負の相関があることが予測される。

自尊感情は、「自分に対してこれでよい (good enough) と感じるような自分自身に対する肯定的感情」と定義される (Rosenberg, 1965)。よって、何か失敗した時に自分自身をゆるす傾向を測定する自己へのゆるし傾向性の両尺度は、自尊感情尺度と正の関連があることが予想される。

ゆるせなかったと感じた出来事の頻度については、ゆるし傾向が高い人は、それぞれの対象に対してゆるせないと感じる出来事が少ないことが予想される。従って、ゆるし傾向性尺度との間に負の関連があることが予想される。

方法

(1)調査対象 茨城県内の公立中学校 3 校の 1～3 年生 9 学級 320 名 (男子 144 名, 女子 176 名)、並びに公立高

校 2 校の 1～2 年生 6 学級 276 名 (男子 130 名, 女子 146 名)が対象となった。これらの内、欠損値のない 553 名分 (中学男子; 134 名, 同女子; 164 名, 高校男子; 117 名, 同女子; 138 名, 有効回答率 92.8%) のデータが分析対象となった。なお、研究 1 の調査対象者とは重複していない。また、再検査信頼性の検討のために、協力の得られた A 中学校 1, 2 年生 2 学級 (73 名), B 高校 1, 2 年生 4 学級 (134 名), 計 207 名に対して、約 1 ヶ月の間隔をあけて、ゆるし傾向性尺度を再度実施した。被調査者の同定は出席番号で行った。

(2)調査内容

①ゆるし傾向性尺度

研究 1 で作成された 23 項目のゆるし傾向性尺度を用いた。研究 1 に従い合計得点を算出し分析を行った。

②ゆるせないと感じた出来事の頻度

「最近、3 ヶ月のあなたの生活の中で起こった出来事についてお聞きします。」と教示し、他者に関しては、「自分以外の誰かに対して「ゆるせない」と感じた出来事がありましたか?」の 1 項目、自己に関しては、「自分自身を「ゆるせない」と感じた出来事がありましたか?」の 1 項目に対して、「よくあった(4 点)」～「全然なかった(1 点)」の 4 件法で回答を求めた。

③反応的攻撃性尺度

濱口 (2004) の「反応的攻撃性尺度」を用いた。本尺度は、12 項目からなる質問紙で、「報復意図 (7 項目)」、「怒り (5 項目)」の 2 つの下位尺度で構成されており、高い信頼性、妥当性が認められている。4 件法で評定を求めた。本尺度は、中学生用に標準化されているが、濱口・森・三浦 (2005) は、高校生を対象に本尺度を用い、同様の因子構造、信頼性を確認しているため、高校生にも使用可能であると判断した。

④自尊感情尺度

Rosenberg (1965) の開発した Self Esteem Scale を山本・松井・山成 (1982) が邦訳した「自尊感情尺度」を用いた。10 項目から構成され、5 件法で評定を求めた。日本人を対象にした調査では、10 項目のうちの 1 項目が主成分に負荷しないことが指摘されている (山本他, 1982)。従って、本尺度について主成分分析を行った。その結果、項目 8 「私は自分自身をもっと尊敬できるようにになりたい。」の負荷量が -0.19 と極端に低かったため (他の項目は .50 以上)、項目 8 を除く 9 項目を分析の対象とした。

(3)調査実施手続き 研究 1 と同様

(4)調査実施時期 中学校 2 校の 1 回目のデータは 2005 年 9 月下旬に収集し、A 中学の 2 回目のデータは

5週間後の11月上旬に収集した。高校2校の1回目のデータは同年10月上旬に収集し、B高校の2回目のデータは6週間後の11月中旬に収集した。

結果と考察

(1)再検査信頼性の検討 1回目と約1ヶ月後に行われた2回目の調査で対象者を同定した結果、174名(中学生65名,高校生109名)を分析の対象とした。

1回目に行った調査と2回目に行った調査との相関係数は、他者へのゆるし傾向得点においては $r = .79 (p < .01)$, 自己への消極的ゆるし傾向得点においては $r = .86 (p < .01)$, 自己への積極的ゆるし傾向得点においては $r = .74 (p < .01)$ となり、各下位尺度とも十分に高い値を示した。従って、ゆるし傾向性尺度は、十分な時間的安定性を備えた尺度といえるであろう。本研究では、対象を他者とした場合、特定の他者を想定させてはいない。調査対象者が想定した他者像によって、結果が異なることが危惧されたが、本研究の結果から、本尺度は他者を対象とした場合の個人の安定した傾向を測定しているといえるであろう。

(2)ゆるし傾向性尺度と基準尺度との関連の検討 並存的妥当性を検討するために、ゆるし傾向性尺度と基準尺度との相関を求めた。ゆるし傾向性尺度において一部性差、学校段階差が認められたため、性別×学校段階別の4群について分析を行った (TABLE 4)。

その結果、他者へのゆるし傾向得点は、全ての群で、報復意図、怒りと中程度の負の相関が示された。自尊感情では、中学男子、女子において弱い正の相関が示されたが、高校男子、女子では、有意な相関が示され

なかった。自己への消極的ゆるし傾向得点は、全ての群において、怒りと中程度の負の相関、自尊感情と中程度の正の相関が示された。報復意図とは、中学男子以外の群で、弱い負の関連が示された。自己への積極的ゆるし傾向得点は、全ての群において、自尊感情と中程度の正の相関が示された。報復意図とは、高校女子以外の群で弱い負の関連が示され、怒りとは、高校男子以外の群で、弱い負の関連が示された。

従って、基準尺度との相関において、おおむね予測が支持された。

(3)ゆるせないと感じた出来事の頻度得点との関連の検討 妥当性検討のために、ゆるし傾向性尺度とゆるせないと感じた出来事の頻度との相関を、性別×学校段階別の4群について検討した。(TABLE 5)。

その結果、他者へのゆるし傾向得点は、全ての群で、他者をゆるせないと感じた出来事の頻度得点と有意な負の相関が示された。自己への消極的ゆるし傾向得点は、全ての群において、自己をゆるせないと感じた出来事の頻度得点と有意な負の相関が示された。自己への積極的ゆるし傾向得点は、全ての群において、自己をゆるせないと感じた出来事の頻度得点と低い値ではあるが、有意な負の相関が示された。

従って、ゆるせないと感じた出来事の頻度得点との関連において、概ね予測は支持された。

研究 3

目的

ゆるし傾向性と中高生の外在化問題、内在化問題と

TABLE 4 ゆるし傾向性尺度と関連変数との相関係数

ゆるし傾向性/関連尺度		報復意図	怒り	自尊感情
他者への ゆるし傾向	中学・男子	-.71***	-.60***	.30***
	中学・女子	-.71***	-.47***	.26**
	高校・男子	-.61***	-.28***	.16
	高校・女子	-.66***	-.34***	.07
	全体	-.68***	-.44***	.20***
自己への 消極的ゆるし傾向	中学・男子	-.11	-.28***	.45***
	中学・女子	-.21**	-.43***	.48***
	高校・男子	-.24*	-.53***	.54***
	高校・女子	-.23***	-.48***	.50***
	全体	-.19***	-.43***	.48***
自己への 積極的ゆるし傾向	中学・男子	-.29**	-.29**	.61***
	中学・女子	-.25**	-.29***	.53***
	高校・男子	-.24*	-.09	.38***
	高校・女子	.13	-.18*	.50***
	全体	-.24***	-.22***	.50***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

TABLE 5 ゆるし傾向性尺度とゆるせなかった出来事の頻度との相関係数

	他者をゆるせなかった出来事の頻度				
	中学・男子	中学・女子	高校・男子	高校・女子	全体
他者へのゆるし傾向	-.43***	-.39***	-.22*	-.32***	-.35***
	自己をゆるせなかった出来事の頻度				
	中学・男子	中学・女子	高校・男子	高校・女子	全体
自己への消極的ゆるし傾向	-.38***	-.39***	-.39***	-.48***	-.43***
自己への積極的ゆるし傾向	-.13*	-.15*	-.25***	-.20**	-.18**

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

の関連を検討することを目的とした。

本研究では外在化問題の指標として、身体的攻撃、および、関係性攻撃を取り上げる。攻撃行動は、その形態から身体的攻撃、言語的攻撃、関係性攻撃に分類される。身体的攻撃は、叩く、蹴るなどの行動を表し、言語的攻撃は、侮辱する、非難するなどの行動を表す。関係性攻撃は、近年、攻撃性研究において注目されている概念であり、代表的なものとして、仲間はずれ、悪いうわさを広めるなどが挙げられる。児童期後半から思春期にかけて、認知的発達が顕著になり、身体的攻撃は減少していく一方で、より精緻化された人目につかない関係性攻撃の形態を用いられていることが確認されている(Crick & Grotpeter, 1995)。こうしたことから、中高生を対象に、外在化問題の指標として身体的攻撃の他に、関係性攻撃とゆるし傾向性との関連を検討することは意義のあることだと考えられる。Forgivenessは、他者との関係性を維持し、修復する機能を持つため(Denham et al., 2005)、ゆるし傾向性、特に、他者へのゆるし傾向と攻撃行動の間には負の関連があることが予想される。

他方、内在化問題の指標として、抑うつ傾向、特性不安を取り上げる。海外の先行研究では、心理的well-being、精神的健康とforgivenessの関連が検討されており、精神的健康の指標として抑うつ、不安が多の研究で用いられている。大学生、一般成人を対象にした先行研究において、FO, FSeは抑うつ、不安の低減とポジティブな関連があることが見出されている(Toussaint & Webb, 2005)。従って、ゆるし傾向性と、抑うつ傾向、特性不安との間には負の関連があることが予想される。

方法

(1)調査対象者 茨城県内の公立中学校3校の1～3年生11学級387名(男子198名,女子189名)、並びに公立高校2校の1～2年生6学級243名(男子112名,女子131名)が対象となった。これらの内、欠損値のない、

556名分(中学男子;180名,同女子;166名,高校男子;99名,同女子;111名,有効回答率88.2%)のデータが分析対象となった。なお、研究1、研究2の調査対象者とは重複していない。

(2)調査内容

①ゆるし傾向性尺度

研究1で作成された23項目のゆるし傾向性尺度を用いた。研究1に従い合計得点を算出し分析を行った。

②抑うつ尺度(CES-D)

米国の国立精神衛生研究所により、うつ病の疫学研究用に作成された自己評価尺度の日本語版(島・鹿野・北村・浅井,1985)を用いた。本尺度は中高生にも適応可能であることが確認されている。20項目に対して、過去1週間の自分の状態を振りかえらせ、4件法で評定を求めた。

③特性不安尺度(STAI)

清水・今栄(1981)によって邦訳された日本語版STAIのうち特性不安尺度を用いた。本尺度は、20項目からなり、回答は4件法で求めた。本尺度の適用範囲年齢は、中学生～成人とされている。

④関係性攻撃尺度

櫻井(2001;未公開)によって作成された「関係性攻撃尺度」を用いた。11項目からなり、回答は、5件法(「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」)で求めた。本尺度は、中学生を対象に標準化され、高い内的一貫性が認められている($\alpha = .89$)。また、教師評定によって十分な妥当性が確認されている。そのため、中学生対象の調査では、使用可能であると判断した。しかし、高校生用に適用可能か判断し兼ねる為、高校生対象の調査では、本尺度を除く質問紙を用いた。

⑤身体的攻撃尺度

秦(1990)によって作成された「敵意的攻撃インベントリー」の下位尺度の一つである「身体的攻撃」尺度を用いた。10項目からなり、5件法で評定を求めた。

(3)調査実施手続き 研究1、2と同様。

(4)調査実施時期 2005年11月上旬
結果と考察

性別×学校段階別の4群について、ゆるし傾向性尺度と内在化問題、外在化問題との相関係数をTABLE 6に示す。さらに、各群について、それぞれ重回帰分析を行い、ゆるし傾向性が外在化問題、内在化問題に与える影響を検討した(TABLE 7)。

まず、相関係数の結果から検討する。他者へのゆるし傾向は、抑うつ、不安と弱い負の相関、身体的攻撃、関係性攻撃とは、中程度の負の相関が示された。また、自己への消極的ゆるし傾向、自己への積極的ゆるし傾向では、特に内在化問題と中程度の負の相関が示された。従って、概ね予測どおりの結果が得られた。

本研究では、外在化問題の指標として、身体的攻撃、関係性攻撃を取り上げた。関係性攻撃は、身体的攻撃の結果と同様、主に他者へのゆるし傾向と関連がみら

れたが、他者へのゆるし傾向と身体的攻撃、関係性攻撃との相関の値を比較すると、関係性攻撃のほうが身体的攻撃よりも値は高くなっている。他者をゆるそうとしない傾向を持つ中学生は、身体的攻撃よりも関係性攻撃に従事しやすい可能性が示唆されたことは意義深い。他者をゆるせないことで、表出される攻撃行動は、外顯的なものより、目に届きにくい方法でなされていることを示したものであり、年齢が上がるにつれて、いじめなどの実態は見えにくくなっているという岡本(2004)の主張を支持する結果となった。従って、いじめなどの予防という点からも、ゆるし傾向性の有効性が示唆されたといえよう。

次に、重回帰分析の結果から、他者へのゆるし傾向は、内在化問題よりも外在化問題を予測すること、自己へのゆるし傾向は外在化問題よりも内在化問題を予測することが示され、自己への消極的ゆるし傾向のほ

TABLE 6 ゆるし傾向性尺度と関連変数との相関係数

ゆるし傾向性/関連尺度		抑うつ	特性不安	身体的攻撃	関係性攻撃
他者へのゆるし傾向	中学・男子	-.18*	-.27***	-.25*	-.46***
	中学・女子	-.18**	-.23***	-.34***	-.46***
	高校・男子	-.23*	-.35**	-.33***	
	高校・女子	-.29**	-.26***	-.30***	
	全体	-.21***	-.25***	-.29***	-.46***
自己への消極的ゆるし傾向	中学・男子	-.40***	-.52***	-.19**	-.09
	中学・女子	-.36***	-.49***	-.08	-.16**
	高校・男子	-.45***	-.67***	-.02	
	高校・女子	-.49***	-.69***	.00	
	全体	-.42***	-.58***	-.04	-.15***
自己への積極的ゆるし傾向	中学・男子	-.37***	-.45***	-.10	-.09
	中学・女子	-.25***	-.34***	-.03	-.08
	高校・男子	-.24*	-.37***	-.23***	
	高校・女子	-.37***	-.45***	-.01	
	全体	-.31***	-.40***	-.08	-.09

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

TABLE 7 各尺度を基準変数とした重回帰分析結果

サンプル	抑うつ					不安					身体的攻撃					関係性攻撃		
	中・男	中・女	高・男	高・女	全体	中・男	中・女	高・男	高・女	全体	中・男	中・女	高・男	高・女	全体	中・男	中・女	全体
他者へのゆるし傾向	-.07	-.15	-.14	-.23	-.13	-.14	-.13	-.21	-.18	-.15	-.23	-.36	-.29	-.31	-.30	-.29	-.47	-.45
自己への消極的ゆるし傾向	-.31	-.32	-.41	-.38	-.36	-.42	-.44	-.62	-.59	-.50	-.15	-.09	-.09	-.05	-.01	-.02	-.18	-.12
自己への積極的ゆるし傾向	-.27	-.14	-.06	-.11	-.18	-.31	-.21	-.09	-.19	-.22	-.01	-.08	-.13	-.01	-.01	-.01	-.08	-.05
(df)	(3,176)	(3,162)	(3,95)	(3,107)	(3,552)	(3,176)	(3,162)	(3,95)	(3,107)	(3,552)	(3,176)	(3,162)	(3,95)	(3,107)	(3,552)	(3,176)	(3,162)	(3,342)
F値	18.42	11.75	8.76	32.40	55.44	39.13	24.83	31.54	47.20	132.75	5.65	7.89	4.06	4.17	18.00	15.81	17.22	32.40
R ²	.24	.18	.24	.33	.23	.40	.31	.52	.55	.42	.09	.13	.13	.10	.09	.21	.24	.22

注) 上三段の値は標準偏回帰係数 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

うが、積極的ゆるし傾向よりも強力な負の予測因となることが示された。従って、ゆるし傾向性がある程度外在化問題、内在化問題の軽減に有効である可能性が示唆された。

各群において異なる特徴がみられた点について検討する。1つ目は、抑うつを基準変数とした重回帰分析の結果から、中学男子、高校男子では、他者へのゆるし傾向性からの β が有意でなかったのに対して、中学女子、高校女子からの β は有意であった点である。この結果から、女子にとって、他者へのゆるし傾向は、自己への消極的ゆるし傾向と同様に、抑うつの負の予測因になることが示された。このことは、女子のほうが男子よりも人間関係への関与が強い(落合・佐藤, 1996)という結果を反映したものと考えられる。2つ目は、中学男子で、他者へのゆるし傾向のほかに、自己への消極的ゆるし傾向が身体的攻撃の負の予測因となり、中学女子で、自己への消極的ゆるしが関係性攻撃の負の予測因となった点である。失敗などの場面に遭遇した場合に生じた不快な反応をうまく処理できず、自分を責めてしまう中学男子は身体的攻撃に、中学女子は関係性攻撃に従事する可能性が示唆された。自分を責め続けてしまうことで、人に危害を与えることは、「八つ当たり」とも考えられるが、その表出方法にも性差がみられたことは攻撃行動の性差を反映した結果と考えられる(Crick & Grotpeter, 1995)。

まとめと今後の課題

本研究では、近年諸外国で研究が盛んに行われている forgiveness の概念に注目し、ゆるし傾向性として実証的に取り上げ、わが国の中学生・高校生を対象として、外在化問題、内在化問題との関連を検討することを目的とした。

研究1では、他者へのゆるし傾向、自己への消極的ゆるし傾向、自己への積極的ゆるし傾向の3因子からなる23項目の中高生用ゆるし傾向性尺度が作成された。研究2では、ゆるし傾向性尺度の信頼性、妥当性の検討が行われた。その結果、他の尺度との間に予測したとおりの関連性が見られ、高い併存的妥当性を有していることが確認された。また、内的一貫性、再検査信頼性の検討においても十分な値が得られ、信頼性が確認された。研究3では、ゆるし傾向性と外在化、内在化問題との関連が検討された。その結果、他者へのゆるし傾向は、内在化問題よりも外在化問題と関連すること、自己へのゆるし傾向は外在化問題よりも内在化問題と関連することが示され、ゆるし傾向性は、

内在化問題、外在化問題の軽減に有効である可能性が示唆された。さらに、海外の成人を対象とした研究の結果と同様に、わが国の青年期においても、ゆるし傾向性は外在化問題、内在化問題と負の関連が示されたことは新しい知見であるといえよう。

最後に、本研究の限界と課題について述べる。本研究から得られた結果は、一時点における調査により検討されたものであるため、ゆるし傾向性と外在化問題、内在化問題との因果関係について確認されたわけではない。因果の方向を特定した上で、今後より詳細な検討が必要となろう。

また、本研究の一連の研究によって、ゆるし傾向性の有効性が示唆された。そこで、今後必要になるのは、ゆるし傾向性を促進する要因、あるいは、抑制する要因の検討であろう。ゆるし傾向性を促進させる環境的条件や個人内要因が明らかにされてこそ、ゆるし傾向性を促進させる教育や介入方法の開発につながるものと考えられる。今後は、促進要因、抑制要因として働く変数を特定していくことが必要であろう。

海外において forgiveness の研究は盛んに行われているが、わが国では、forgiveness の概念を用いた研究は極僅かしかなく、始まったばかりといえる。本研究は、forgiveness の概念を用いることの意義を見出す基礎的な研究と位置づけられる。今後、forgiveness、ゆるし傾向性の概念が注目され、多くの研究が行われることが望まれる。

引用文献

- Achenbach, T. M. 1991 *Integrative guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles*. Burlington, VT : University of Vermont.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Denham, S., Neal, K., Wilson, B., Pickering, S., & Boyatzis, C. 2005 Emotional development and forgiveness in children : Emerging evidence. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness*. New York : Brunner-Routledge. Pp.127-142.
- Enright, R. D., & Fitzgibbons, R. P. (Eds.) 2000 *Helping clients forgive : An empirical guide for resolving anger and restoring hope*. Washington, D. C. : American Psychological Association.

- 藤岡淳子 2001 非行少年の加害と被害—非行心理臨床の現場から 誠信書房
- Hall, J. H., & Fincham, F. D. 2005 Self-forgiveness : The stepchild of forgiveness research. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 621-637.
- 濱口佳和 2004 反応的攻撃性 (reactive aggression) 尺度 (中学生版) の作成—反応的・道具的攻撃性尺度 (RIS 中学生版) の改訂(2)— 日本教育心理学会第 46 回大会発表論文集, 493.
- 濱口佳和・森 文弓・三浦秀徳 2005 青年の能動的・反応的攻撃性に関する研究(1) 日本犯罪心理学会第 43 回大会発表論文集, 146-147.
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227-234. (Hata, K. 1990 Construction of an inventory for assessing different modes of hostile aggression. *Japanese Journal of Psychology*, **61**, 227-234.)
- 小西友七・南出康世 (編集主幹) 2001 ジーニアス英和大辞典 大修館書店
- McCullough, M. E. 2001 Forgiveness : Who does it and how do they do it? *Current Directions in Psychological Science*, **10**, 194-197.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65. (Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 岡本祐子 2004 日本におけるいじめの様相 坂西友秀・岡本祐子 (編) 「いじめ・いじめられる青少年の心」1章2節 北大路書房 Pp.8-19.
- Pargament, K. I., McCullough, M. E., & Thoresen, C. E. 2000 The frontiers of forgiveness : Seven directions for psychological research and practice. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness : Theory, research, and practice*. New York : Guilford. Pp. 299-319.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- 櫻井良子 2001 中学生における関係性攻撃の特徴 筑波大学人間総合科学研究科中間論文 (未公開)
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 1985 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 State-Trait Anxiety Inventory の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353. (Shimizu, H., & Imae, K. 1981 Development of the Japanese edition of the spielberger state-trait anxiety inventory (STAI) for student use. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **29**, 348-353.)
- 高田利武 2004 「日本人らしさ」の発達社会心理学 ナカニシヤ出版 (Takata, T.)
- Tangney, J. P., Boone, A. L., & Dearing, R. 2005 Forgiving the self : Conceptual issues and empirical findings. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness*. New York : Brunner-Routledge. Pp.143-158.
- Thompson, L. Y., Snyder, C. R., Hoffman, L., Michael, S. T., Rasmussen, H. N., Billings, L. S., Heinze, L., Neufeld, J. E., Shorey, H. S., Roberts, J. C., & Roberts, D. E. 2005 Dispositional forgiveness of self, others, and situations. *Journal of Personality*, **73**, 313-359.
- 登張真稲 2003 青年期の共感性の発達 : 多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148. (Tobari, M. 2003 The development of empathy in adolescence : A multidimensional view. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 136-148.)
- Toussaint, L., & Webb, J. R. 2005 Forgiveness, mental health and well-being. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness*. New York : Brunner-Routledge. Pp.349-362.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. 1982 The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
- 渡辺弘純 2006 日本の児童生徒における人間の多様性への寛容について 愛媛大学教育学部紀要, **53**, 29-40. (Watanabe, H. 2006 On tolerance for human diversity in Japanese children and adolescents. *Bulletin of the Faculty of Education, Ehime University*, **53**, 29-40.)
- Worthington, E. L., Jr. 2006 *Forgiveness and*

reconciliation : Theory and application. New York : Brunner-Routledge.

謝 辞

本論文は、筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科に提出した中間論文（2005年度）の一部を加筆・修

正したものです。研究にあたり、ご指導・助言を頂いた先生方、並びに、調査にご協力いただきました中学校、高校の先生方、生徒の皆さんに厚く感謝申し上げます。

（2006.8.25 受稿, '07.6.26 受理）

Dispositional Forgiveness and Externalizing and Internalizing Problems : Junior and Senior High School Students

MASAYASU ISHIKAWA (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND YOSHIKAZU HAMAGUCHI (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2007, 55, 526-537

Outside of Japan, over the last decade, an increasing amount of empirical research has been done on the topic of forgiveness. The purposes of the present study were to develop a dispositional Forgiveness Scale, and to investigate the relations among dispositional forgiveness and externalizing and internalizing problems in junior and senior high school students in Japan. In Study 1, in which the participants were 574 junior and senior high school students, the dispositional Forgiveness Scale was developed. Factor analysis revealed that the dispositional Forgiveness Scale consisted of 3 factors : “forgiveness of others,” “negative forgiveness of self,” and “positive forgiveness of self.” In Study 2, in which the participants were 553 junior and senior high school students, the reliability and validity of the dispositional Forgiveness Scale were investigated. The results confirmed that the dispositional Forgiveness Scale had high reliability and validity. In Study 3, in which 556 junior and senior high school students participated, the relations among dispositional forgiveness, externalizing problems (physical aggression and relational aggression) and internalizing problems (depression and anxiety) were investigated. Correlational and multiple regression analyses indicated that dispositional forgiveness was negatively related to both externalizing and internalizing problems. These results suggest that forgiveness leads to a reduction in part of externalizing and internalizing problems.

Key Words : dispositional forgiveness, externalizing problems, internalizing problems, junior high school students, senior high school students